2024 年 2 月号

Community & Friend

有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 2 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

先々週、Milan にいる時、会社からメールが転送され、画像のナモが亡くなったと知った。

ネットで検索すれば出て来る『橋口譲二』って写真家が撮ったものではないか。一度私を撮ってもらったことがある。肘から少し先、野菜を持つ手を撮ってくれていただけだが。週刊新潮の記事に掲載する様子だった。それを実家で、表紙にそれらしき記事の見出しが出ていたのだろう、兄が開いて、これは弟の手だと、直ぐに気がついたらしく連絡して来た。要は、中身を映し出せる人って話しである。見事、ナモを写し出している。

『長本兄弟商会』通称ナモ商会。私が初めて就職と呼べる、初めてというか、後にも先にも就職という言葉が当てはまるところは此処だけだが、仕事に就いたところ。24 歳だったかな。

ナモ商会が誕生したのが、1975 か 76 年で、私がそこに参加したのが、77 年だった。『有機栽培・無農薬』野菜だけを農家から仕入れて販売する八百屋。そういえば、『無農薬なんて、否定語が入ったテーマはいずれ廃れてしまう』『だから、他の言葉を考えよう』とナモに言ったように記憶している。

そもそも初めてナモ商会の誕生を知ったのは、私たちが屯していた練馬区の石神井ってところに、未だ店舗を持っていなかった時期の話しだが、創設メンバーのひとり山尾三省が販売に来ているので、買い物に行ってほしいと連絡を受けた。少し距離はあったが、当時使っていた小型のトラックで行った。見るものすべてが美味しそうに思えて、持っていたお金のすべてを使った。小豆がやたら存在感を発揮していて、何に使おうか、なんて考えもしないで 2kg 買った。玄米も 5kg 買った。ところが、その玄米を計る容器も、台秤も 5kg に対応しているものじゃなくて、すっかり三省は混乱した様子だった。その時は、脳が覚醒する状態にあったので、余分なことは考えず、方法論が真っすぐに見えて、その通りにしたら上手く計れ、持参していたテント地の米袋に入れた。おかげで暫くは赤飯の毎日だった。

その三省とナモは仲良しで、二人が米国で見た Natural Foods の店を日本で遣ろうという事になったらしい。でも、ひと世代下の世代と組まないと、となったのだろうと想像しているが、あの頃、ミニコミ誌の『人間家族』荒川さんって方の息子さんが同じ石神井にグループで住んでいて、その方達の都合で直ぐに手が空いている『誠一』さんと始められ、その後更に二人が入り、5 人がその創設のメンバーだと聞いていた。

実はそれ以前に、山尾三省の詩集を通称『樵夫』から借りて読んでいて、その一節に『納得のいく仕事がしたい』とあった。もちろん、手前勝手な納得で良いのだが、あるいは後出しでその様に創り上げて行っても良いのだが、その一節が出会いとしてはあった。

で、その 樵夫(きこり) だが、彼とは早くに出会いがあり、高校の同級生から『大学のキャンパスでテントを張って暮らしている』と聞いて、何もかも打っちゃって其処に出掛けた。数年して、その彼が『プラサード書店』という『出版社から直で仕入れ、取次店の配本に頼らなくて、自分の思う書籍だけで構成する本屋を作るから手伝ってくれないか、でも給料は出せないんだ』という話しに乗って『いいよ』と言った。

この階段を上った 3 階にその店がある。3 階のその奥はフリースクールを遣っていて、2 階はその手の人が集まる喫茶と食事ができる店が入っていた。右に少し写っている 1 階が長本兄弟商会という訳。当初は奥に、『ジャムハウス』ってヒッピーが好む飾り物を売っていた。この店主がこのビルのオーナーと知り合いで、ビル丸ごと同じ価値観を持っている者が、それぞれの思惑で、仕事をしている事になる。もう少し言うと、その価値観は、当時の社会通念からはみ出していた。

紙面が無くなって来たので先を急ぐが、きこりが指示する出版社に行って取引を依頼し、出来ればその場で本を仕入れて、背負子に詰めて満員電車で帰って来る。それを週に 3 日、残りの 3 日を、きこりの紹介で長本兄弟商会にバイトとして入ることになったが、此処まで書いたように其れ等は何の違和感もなかった。

『えっ』と思ったのは、最初の給料日である。予め先の誠一さんから給与体系は聞いていて、その体系に自分の週 3 日を当てはめると、4 万円になる。封筒を差し出してナモが『いくら要るんだ』と聞くので、その金額を言った。『それくらいは入っている』と渡された。中には週 6 日分の月額が入っていた。その時のナモの、笑っていても奥に確信に満ちた眼を、今も思い出す事が出来る。

社名の『兄弟』と『商会』が気に入っていた。今で言うと Conscious Capitalism という事になる。それまではみんな hippie という名で commune を各地で形成していた。ナモは『俺たちの屋号は 共同体』と言っていたが、共同体の定義は『ひとつ財布』になる。そこに『自力更生』『独立採算』の名言が飛び出し Commune から Community に進化した。

ナモは決して社会に更生した訳ではない。最初からナモがいたところが社会だった。俯瞰していた訳でもない、みんなと同じ目線の高さにいた。ただ、みんなの時間軸より先にいた。日曜日に『そのお別れの会』に行った時、奥さんの京子さんと店で話ししていると、妙齢の女性が買い物に来ていて、京子さん曰く『この方は、子供の頃にお母さんと来ていたのよ』だった。また、『ナモは、私たちの野菜が普通になるのに 3 世代かかると言っていた』『でも、有機農産物の法律が出来た』。確かに、普遍化の入り口に来ているが、その『精神』がみんなに宿るには、やはり 3 世代はかかるのかな。

考えてみれば、長本兄弟商会の風情で会社を運営して来た。これからはナモの意志も継ごうと思う。

有限会社アルファー：吉田清一郎